

解説 — 讀仏偈について —

財団法人芦屋仏教会館理事 瓜生津 隆文

『無量寿經』の上巻に出る四言八十句からなる偈文で、「嘆仏偈（歎仏偈）」とも言います。かつて世自在王といふ名の如来が世に現れた時、その説法を聞いたある国王が、国と王の身分を捨てて修行者となり、師である世自在王仏のもとで願を起こすにあたつて述べた偈頌、という構成をとります。法藏と名を変えた修行者が、師仏である世自在王仏の徳を讃える言葉で始まります。内容的には、広く仏徳を讃えたものであり、さらに法藏比丘が、自らも大いなる徳を備えた仏となることを志し、しかも諸仏の國を凌駕する國土を打ち立ててすべての衆生を収め救う旨の誓いを立て、師の証明を請うというふうに展開しています。したがつて内容の点から言えば、「誓いの偈」とも言えるものです。

前半部分で仏の徳を広く讃えているという点で「讃仏偈」という名称は当を得たものと言えます。が、これを単に、世自在王仏の徳を讃えた「讃世自在王仏偈」と見るならば、讃仏の内容も、我々とは直接には関わりのない彼方の話となってしまいます。また逆に、法藏菩薩を、自らの内面的真実の象徴と見るならば、阿弥陀仏（および浄土）を内在的に見る自性唯心の邪執として避けられましょう。法藏菩薩の偉大なる決意の表明は、他力の救いをまっすぐに仰ぐ者にとつては、頼もしくも慕わしい生きた文言であると同時に、その言葉には、大乗仏教の核心とも言うべき菩薩の勇猛心、利他の精神が力強く脈打っている点にも心を向ける必要があります。